

<基調提案>

バズ学習と総合的な学習の展開

中京大学 杉江 修治

1 総合的な学習の時間をどう捉えるか

情報化、国際化の時代を迎えて、教育改革がさまざまに試みられてきました。そこには、社会の変化にともなって生じてきている子どもの変化、それも問題行動として表面化してきていることがらに対する対応も含まれます。

1970年代の後半から、教育実践の場では「個」が強調されるようになっていきました。一斉指導による画一的な指導の元に、個が埋没させられているという認識があったように思います。教育は、子どもたち一人ひとりの自己実現を最大限援助する営みですから、個への着目という観点は正しいものだったといえるでしょう。

しかし、そこにはひとつの誤りがありました。「個」を他人と切り離して理解したことです。「個」の教育とは何かについての理解が浅かったのです。したがって、指導法の関心も個別指導に偏り、それまで理論的にも実践的にも着実な積み重ねをしてきた協同的手法、すなわち社会的相互作用を積極的に用いた指導法に目を向けなくなってしまいました。「集団を通して個を生かす」という観点を忘れた実践が多く重ねられてきたのです。

こういった指導に対する考え方の背景には「競争」原理が学習の意欲づけに役立つという指導原理についての不十分な理解があったように思います。自由「競争」が社

会を発展させてきた原理だという、おかしな、しかも直感に基づいているにすぎない経験が、教育を動かしてきたというのもおかしなことでした。

競争は必然的に多数の敗者を生み、学習意欲を大きく低下させます。学習への参加が負けを招来するならば、そのような場に入ろうとしなくなる子どもも増えてきます。近年の「学習離れ」はそのような教育文化の産物なのではないか、「さまざまな問題行動」の背景にも競争原理があるのではないかと思わざるを得ません。

教育を通してどのような社会を創ろうとするのか、「個」の強調の背景にはその展望が不十分だったように思うのです。^{人の生きるをわが身に刻み残すこと}人の社会には競争があふれているように見えますが、それが社会を動かしてきたわけではありません。大地に起って風景を眺めているとき、われわれは自分が立っている大地に気づかないことが多いのです。競争は風景であり、協同、共生こそがわれわれ人間が立ってきた大地なのではないでしょうか。もし人間の生きる原理が競争ならば人はとっくに滅びているはずだと、多くの研究者が指摘しています。

今回、「総合的な学習の時間」が設定された背景には、1989年改訂の学習指導要領が示した新しい教育観を実現したいということがあります。これも、文面だけでは、教育の目標があくまで「個」の興味関心、「個」の積極的な学習態度などにとどまってしまう懸念を含んでいます。その後の中教審答申などで言及された、幅広い「生きる力」の育成と関わらせて、「総合的な学習の時間」の意義を一人ひとりの教師が、そして1校1校の学校の教師集団が捉え返す作業をする必要があるように思います。

新たな時代の教育的要請とは何でしょうか。社会の国際化に対しては、そこに適応する技術を「個」が身につけることが大切なのでしょうか。情報化社会に適応する技術を「個」が身につけることが大切なのでしょうか。わたしは、そのような社会の変

個々の
育成は個々の人々の育成

化を理解し、人々がその中でより幸福に暮らせるような社会づくりをめざす「個」の育成こそが今求められているのではないかと考えます。「変化に適応する個」にとどまらない「望ましい変化を作り出すことのできる個」が大切なのだと考えます。「総合的な学習の時間」を、個を切り離し、学習が個だけにとどまるような機会としては

いけないという共通認識があることを確認しておきましょう。

2 バズ学習・協同学習理論の必要性

「総合的な学習の時間」では、必然的にグループ学習が必要だといわれてきています。ただ、技法としてグループを入れるという発想はよくありません。戦後しばらく、生活カリキュラムが中心となって進められた教育では、積極的にグループ学習が用いられました。それは民主的な活動として評価されていますが、1950年を境に急激に消えていった理由は、単に教育に対する右からの圧力だけではありませんでした。

革新的な立場からも、学力の低下が社会を改革していく力を削ぐものだという批判があったのです。当時の文献を見てみますと、指導方法に関する理論的背景がないという指摘を数多く見ることができます。理念を実現するための理論的研究を疎かにしてはならないのです。それは研究者だけの仕事ではありません。実践の中からむしろ課題がだされ、模索的な研究が重ねられなくてはならなかったのです。理念の正しさだけを拠り所にした実践は、息の長いものにならないという先例をわれわれは持っています。

教師の勘と経験だけで進められた理論のない実践であったという点も大きな問題だったのです。

「総合的な学習の時間」を進めるにあたって、われわれは適切な理論をもっているでしょうか。実践はまず教育論、教育観があり、それを実現するための模索があるというのが順序です。その模索の過程で学習指導の理論的研究を取り入れていくという作業が必要なのですが、その準備はなされているでしょうか。現状では、生活カリキュラムの折と同様の準備不足があるように思います。このままでは、結局今までどおりの「教え、導く、学ばせたつもり」の授業になるか、「自由の尊重といいながら実は放任」の授業になりかねません。今、本当に求められている学力の意義を追求し、それを実現する機会として「総合的な学習の時間」を創造することが求められています。

学習指導の理論的研究
実践はまず教育論、教育観があり、それを実現するための模索があるというのが順序です。
その模索の過程で学習指導の理論的研究を取り入れていくという作業が必要なのですが、その準備はなされているでしょうか。
現状では、生活カリキュラムの折と同様の準備不足があるように思います。
このままでは、結局今までどおりの「教え、導く、学ばせたつもり」の授業になるか、「自由の尊重といいながら実は放任」の授業になりかねません。
今、本当に求められている学力の意義を追求し、それを実現する機会として「総合的な学習の時間」を創造することが求められています。

ここで教師の専門性について、若干触れておきたいと思います。最近、社会人を教師に登用する動きも出てきています。これはどうなのでしょう。歓迎する向きも多いようなのですが、わたしには懸念があります。教師として以外の社会的経験が教師としての資質に本当に有意義なのでしょう。教師という仕事は誰でもできるという感覚は危険だと思います。むしろ佐藤学さんが言っているように「教師という仕事は誰にもできない難しい仕事である」という認識の方が正しいように思うのです。

経験を踏まえた研究的実践を通して、より適切な学習指導の機会を作っていくという文化が、学校の内外にもっと作られなくてははいけません。

バズ学習は1960年頃にその基礎が作られました。古いという評価は当てはまりません。なぜなら、この時期すでに、ブルーナーが『教育の過程』で、今、学習指導要領に載せられている新しい学力観と同様の学力の必要性を説いているのです。バズ学習はそのような時代背景の中で研究が進められてきました。その中身は今に十分通じる

ものですし、今だからこそバズ学習の意義がより良く分かるようになってきているのです。

1980年代に入り、先進諸国では人間関係を基盤とした協同学習の意義に気づき、それは現在ではもっとも関心と呼ぶ指導法となっています。また、実践化も広く行なわれています。「総合的学習の時間」の実践にあたって、経験のみからの発想でよしとする不精を捨て、このバズ学習・協同学習の原理を学習しないでは教育のねらいを実現することは難しいでしょう。

3 バズ学習・協同学習の基本

バズ学習・協同学習は、互いに育ち合う仲間だという学習集団の中の信頼関係、自分の成長を教師が願っているという確信の持てる教師との信頼関係が生む、学習への動機づけ、意欲づけに注目する指導法といえます。それは技法ではなく、教育心理学の実証的研究に支えられた指導論なのです。

人間関係の重要性を
協同学習の基盤として
総合的に扱う

協同と競争に関する誤った認識がわれわれの社会では一般的に見られます。競争はよりかかりの甘い事態で、競争は鍛え合う厳しい事態だというのはそれにあたります。

協同と競争の違いは助け合うか競い合うかという、集団のプロセスで区別することがそのような誤解を招いています。協同と競争の違いは集団の目指すゴールの違いなのです。共に伸びることが目標ならば協同、最終的に順位を決めるのが競争です。したがって、よきライバル、切磋琢磨は協同の範疇に入ります。

競争は安易な動機づけの方法だという他はありません。協同による学習を適切に進めることは容易ではありません。合衆国の協同学習研究者ジョンソンは、「協同学習は容易だ」という誤った考えが広く普及していることを指摘しています。

総合的学習の時間で必然的に必要とされるグループを用いた協同学習も、教師一人

ひとりの経験だけによる進め方では効果的な活動を期待できない可能性が大きいのです。また、総合的学習の時間が他の教科指導などと異なった原理で進められることも、子どもたちの学校生活に混乱を引き起こすこととなります。そこでは当然のことながら、指導原理の一貫性（バズ学習が唱える重要な原理の一つですが）を心がける必要があります。総合的学習の導入は同時に学校における指導原理を見なおす機会にもなるのです。

そこではまた、積極的に社会的相互作用、すなわち話し合いを導入しますが、それは学習の効率を高めるだけでなく、学習内容を社会的知として修得させる働きももちます。学習を、個にとどまらない、より幅広いものとするのが可能になるのです。

ただ、実践にあたっては、バズ学習・協同学習の理論を学ばなくてはなりません。グループを組めば協同学習になるわけではありません。児童生徒の参加・協同・成就に配慮した実践をみがくに際して、この全国バズ学習研究大会での参加者同士の相互作用が積極的な意義を持つものと思います。

<参考図書>

- 有元・加藤・望月・杉江編 1997 『学校は変わるか』 日本教育総合研究所
- ジョンソン他（杉江・石田・伊藤・伊藤訳） 1998 『学習の輪：アメリカの協同学習入門』 二瓶社
- 杉江修治 1999 『バズ学習の研究』 風間書房